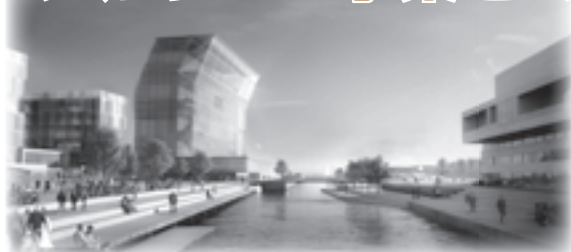


ノルウェー事業とムンク



2019 年完成予定の新ムンク美術館 (予想図)

今、当社のノルウェー現地法人(出光ペトロリアムノルゲ)には総勢約 60 人の社員がいるが、日本人は 6 人であり、日本人以外の外国人が主力となっている。60 人の内のほとんどはノルウェー人で、ノルウェー国籍以外の人は数人だけである。当社は主にノルウェーで職務経験を積んだ人を採用しているの、ノルウェー人が事業のベースとなる。やはり、海外で事業を行っていく上で、現地の人とうまくやっていけるか否かは重要である。

ノルウェーの件費は高いという難点はあるが、石油開発に関して経験豊富で優秀な人材は増えてきている。石油発見以来、ノルウェーでは石油開発に必要な教育が盛んに行われ、かつ海外の技術も積極的に導入されてきたからである。その意味では、東南アジアなどで事業をするのとは多少違う面もある。ノルウェー周辺の知見や最新の石油探査技術等では彼らの方がむしろ優秀なところもあるので、必ずしも日本人を多く送り込む必要はない。逆に言うと、なぜ日本人がノルウェーで働く必要があるのかということが問われ、日本人赴任者にとっては、それなりに緊張感がある。ノルウェーで日本企業が事業をやるというのはどういう意味かを、現地に赴任して私もいろいろ考えさせられた。

ムンクとの関わり

さて、ムンクは遺言書に「自分の全ての作品を市に寄付する」と書いて世を去った。一説では、ちょうど 1944 年のナチス侵攻時であり、国に作

出光興産(株) 石炭事業部

資源課長 宇山史剛

(前・出光ペトロリアムノルゲ副社長)

品を寄付し国が征服されると、自分の作品がナチスに取られてしまうことを恐れ、オスロ市に寄付したと言われている。それが生誕百周年でのムンク美術館開設(1963 年)のきっかけであった。ここでは絵画だけでなく、彼の身の回りにあったもの全てを引き継いでいる。

もともとムンク美術館は、ムンクから受け継いだ絵画や身の回りの物など 2 万点以上全てを管理するにはあまりにも小さく、美術館を増築する必要があった。しかし、ノルウェーは国としては石油で潤っているが、オスロ市はそれほど財政的に楽ではなく、増築に必要な資金を求めて、美術館の館長が世界を回って寄付を募った。91 年にその館長が今の出光美術館館長・出光昭介に面談した結果、「協力しましょう」ということになり、ムンク美術館の増築はムンクの死後 50 周年にあたる 94 年に完成した。

ちなみに、出光は 89 年にノルウェーのスノーレ油田権益を獲得した。オスロのムンク美術館から声がかかったのは、当社が現地生産を開始したタイミング(92 年)でもあった。出光は、増築費の約半分に相当する額を負担した。

それがムンク美術館支援のスタートであった。

その後、2004 年には、ムンクの有名な作品である『叫び』や『マドンナ』などの絵が盗まれて 06 年に奪還されたが、盗難中の保管状態が悪く、作品の修復には多額の資金が必要となった。そこで、オスロにある出光ペトロリアムノルゲがスポンサーになって 06～09 年の修復事業に関わった。

生誕 150 周年記念イベント

続いて 10～13 年には、ムンク生誕 150 周年記念事業のスポンサーにもなった。12 年にムンクの『叫び』の 1 点がオークションで史上最高の 1 億 1990 万ドルをつけたこともあり、ムンク生誕 150 周年記念事業が注目されることになった。そしてスポンサーの当社は地元のマスコミにも頻繁に取り上げられることになった。

当社は 1 回限りではなく継続的に支援することをポリシーとしてきている。その結果、出光とムンク美術館の関係はノルウェーでは歴史的に一番長期にわたるスポンサーシップの関係だと言われるなど、この社会貢献活動は当社にとっても意味のあるものとなっている。

ムンク美術館では、ムンク作品やムンクに関連する品々を様々なテーマで年 3～4 回、入れ替わり立ち替わり展示する。その準備のためのプロジェクトは数年前から始まる。つまり、関連情報を集めたり、どの作品をどう展示するかなどを研究するプロジェクトがまずスタートするのである。そのような活動に対して継続的なサポートをすることは非常に重要であり、その点においても当社のポリシーとマッチした活動となっている。私は現地では企画・総務・経理を担当する副社長だったので、レセプションの準備やスポンサー会議等でムンク美術館関係者と直接話をする事が多かったが、継続的な関係を高く評価していただいた。

ムンク美術館だけでなく国立美術館もムンクの良い絵画をたくさん所有しており、150 周年記念



ムンク生誕 150 周年イベントを告げる市内バス



ムンク美術館で現地社員との花見会を開催

イベントはジョイントで開催された。街中の様々な場所にはムンクの絵のポスターを目にした。また、ムンクに関連するイベント、例えば、オスロ市内のムンクに由来する場所を歩いて回るツアーなども開催された。

ムンク美術館では通常は多くのムンク作品を同時には見られないが、その時は両美術館で同時にたくさんの作品が展示されたので、私も 4～5 回は見に行った。最終日には家族と入場までに 1 時間以上並ぶことになったが、オスロではそういうことは非常に珍しいことであった。

社会貢献の効用

長い間サポートしたことで、少しずつ当社の活動を知る人も多くなってきた。石油業界の人を集めたパーティーなども、年 1 回ムンク美術館で開催している。そのようなことによって、地元では「出光と言えばムンク」というようにイメージがつながっていくので、我々の事業活動にとっても良い効果があると思っている。

たまに街で、「あなたは出光の人ですか？ ムンクのスポンサーしてますね」とノルウェー人に声をかけられたりすることもある。やはり、長く続けていくことにはそれなりに価値があると思う。

ノルウェーでは、現地の社員がいないと仕事にならない。現地従業員が当社のこの活動を良い活動だと認識し誇りに思ってくれることは、当社にとっても意味があり、社員にとっても良いモチベーションになっていると思っている。(談) ■

◆出光興産株の CSR・環境への取り組み
<http://www.idemitsu.co.jp/csr/>